

Title	インドにおける一農民指導者の思想の軌跡：スワミー・サハジアーナンド・サラスワティー(1889-1950)
Author(s)	桑島, 昭
Citation	大阪外国語大学学報. 21 p.175-p.199
Issue Date	1969-03-20
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80359
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

インドにおける一農民指導者の思想の軌跡

—スワミー・サハジャーナンド・サラスワティー (1889—1950) —

桑 島 昭

श्री कुवाजीमा

स्वामी सहजानन्द सरस्वती (१८८९ - १९५०)

१. भूमिका
२. सन्यासी से किसान सेवक
 - (१) बचपन
 - (२) भूमिहार ब्राह्मण का आन्दोलन
३. सहजानन्द और बिहार प्रान्तीय किसान सभा
 - (१) जमीनदारी प्रथा और किसान
 - (२) किसान आन्दोलन और किसान
 - काँग्रेसी मंत्रिमंडल का जन्म (१९३७) के पहले
 - (३) किसान आन्दोलन और किसान
 - काँग्रेसी मंत्रिमंडल का जन्म के बाद
 - (४) काँग्रेस का त्रिपुरी अधिवेशन
४. सहजानन्द और गाँधी
 - (१) किसान और किसान सेवक
 - (२) किसान आन्दोलन और " अहिंसा "

1 ま え が き

1930年代のインドは、世界恐慌の農民層への衝撃のきびしさにも拘らず、政治指導のあいだでは歴史についての楽観的見通しが語られた時期でもあった。あるいは、衝撃のきびしさの故に農民解放の課題の重さが印象づけられ、民族運動と農民運動の場への農民の登場に大きな期待が寄

せられたのであった。

1934年に創立された会議派社会党は、会議派内のマルクス主義者集団を以て称し、農民運動の育ての親を自認していた。そのイデオログ達は、彼等の運動がインドの土壤に立脚したものであることを主張していたが、その主張とは裏腹にその思想は土壤との距離の大きさを象徴し、歴史についての楽観論はやがてきびしい試練に遭遇せねばならなかった¹⁾。

その意味では、1936年4月の全インド農民組合第一回大会の議長をつとめたスワーミー・サハジャーナンド・サラスワティーの思想の深化と屈折の過程は、より深く土壤にかかわっていたといえるであろう。彼は他国の農民運動についての十分な知識を求めてえられない状況のもとであくまで自己の経験を手がかりに運動を進めざるをえなかったと告白している。

インド「憲政」史の専門家、イギリス人学者クーブランドは、サハジャーナンドを「悪名高い煽動者」として片付けた²⁾。帝国主義の論理からみれば、イギリスの敷いた「憲政」の道を歩まない限り、「無気力な」インド民衆の運動は「煽動」されたものとしてしか映らないことも無理はない。また、1500頁以上の紙面を「真理と非暴力」に捧げたシタラマイヤーの『インド国民会議派の歴史』が彼に言及していないことも当然かもしれない。本稿は、サハジャーナンドの完結した伝記を意図するものではなく、彼の思想の軌跡が、インドの農民解放の課題に問いかけているものが何であるかを探ろうとするものである³⁾。

「註」 1) 拙稿「会議派社会党―『民族戦線と階級戦線の結び目』―」, 国際関係論研究, 第3号, 1968年10月。

2) R. Coupland, *Indian Politics 1936—1942*, London, 1944, p.126.

3) 本稿を未完としたのは、第二次大戦期以降のサハジャーナンドの思想の屈折過程とその重要な意味についてふれるにいたっていないからである。

2 修行僧から農民運動へ

(1) 生 立 ち

スワーミー・サハジャーナンド・サラスワティーは幼い頃の名をナワランガ・ラーイといい、1889年に連合州ガージープル地区の村デーワーに生まれた¹⁾。彼の属するカースト、ジュジャオティヤー・ブラーフマンはカーンヤクブチャ・ブラーフマンの一支流であり、ブンデルカンド地方からこの地域に移り住んだ。このカーストの人達は耕作をおこない、時に武器をとったりしたが、ここに移ってからは同じ種類のブラーフマンであるブーミハールと血縁関係を結ぶようになった。早くして母を失った彼は母方の伯母に育てられた。家族のもとにはわづかのザミーンダーリーの土地と小作地とがあったが、主として耕作に頼る生活をしていたらしい。1899年、彼は約二マイルはなれた高等小学校に入り、六年制の課程を三カ年で終了し、ガージープルのヒンディー中学校、その後同地のドイツ・ミッション高等英学校に進んでいる。12才のときウパナヤナ・サンスカール（入門式）を済ませ、高等英学校の頃はシヴァ寺院に寄宿していた。

家族の期待に逆らってサニヤシー（ヒンドゥーの行者）となるため彼がヴァーラーナシー

に向ったのは1907年2月のことであり、その後の彼の名がサハジャーナンドである。森の動物が耕作もせず食物の用意に思いわづらうこともないのに、われわれ人間は何故そのために苦しまねばならないかと自問し、神の恵みをえるため日夜努める気持からサニヤーシーになったという。20世紀初頭のインドを席捲したベンガル州分割反対運動を契機とする民族解放の息吹きも彼の心を揺ぶることはなく、彼の青年期は政治の世界との通風路を開かないままに始まっている。しかし、社会との徹底した断絶への欲求は却って伝統への安易なもたれかかりの世界を彼に拒否させ、逆にその後の彼の社会活動を導きだすモメントとなる。彼が指摘するように、社会活動や民族への奉仕には関係することなく隠遁を装ってはいるが、実際のところ自分のためには世間に乏しい良い食事、良い衣類と立派な寺を求めるサニヤーシーは少ない。また、彼がサニヤーシーの旅において発見したように、金をためて子供に仕送りをし、あるいは全村民を自分の弟子であると同時に債務者に変えてしまっているサニヤーシーすらいる仕末である。これとは対照的に、彼の場合には「神の恵み」への接近がひたすら求められ、すでに覚えた英語の単語は一つ残らず忘れ去ろうとし、旅にあっては長時間飲食を断つ自己規制力を若い肉体のなかに養っている。それを可能にしたのは、一つには、ブラーフマン（祭司カースト）としては特殊なブーミハール・ブラーフマンとかかわるカーストに属し、正統との一定のずれが純粋性の追求をむしろ強烈にしていること、また、周囲が彼の世間的成功による生活上の困難の打開を願い、その願望を強めれば強める程、彼はこれに反撥し社会との断絶を一層希求するという環境的要因が背後に存在したからであろう。したがって、彼はブラーフマンの伝統的世界にみられる頹廢に到底心を安めることはできなかった。サニヤーシーの旅を通じて「森や丘の泥を浴び」ても神は未だ遠く感ぜられ、ヴェーラーナシーに戻っての約七十年の修行がはじまる。彼はアパールナート寺院にあってサンスクリット文法のほか、ニヤーヤ、サーンキヤ、ミーマンサー、ヴェーダーンタ、ヨーガなどの諸学派を学び、また人にこれらを教えることもあった。だが、サハジャーナンドの孤独癖と俗界の縮図をより鮮やかに映しだしている感のあるサニヤーシー達の集団生活にたいする嫌悪のため、彼はのちにこの寺院をはなれている。

彼がサニヤーシーのならいに従ってダング・ダーラン（携杖の式）をおこなってえた名がスワミー・サハジャーナンド・サラスワティーである。

(2) ブーミハール・ブラーフマンの運動

彼の社会生活への奉仕は意外なところに端を発する。第一次世界大戦がはじまった1914年の12月、彼は誘われるままにビハールに近いバリヤーで開かれたブーミハール・ブラーフマン大連盟の大会に出席した²⁾。彼は大会における講演の一つにおいてサンスクリット語古典にかんするドイツ人学者マックス・ミュラーの業績にふれてインドのブラーフマンの無為を批判した。ブーミハール・ブラーフマンといえば、現在ビハール州のブラーフマン人口の約40%を構成すると推定され、経済的にはすべてのカーストのなかでもっとも強力な土地所有カーストとされている³⁾。

このため、この大会への参加者には、ザミンダール、ラージャー（王）、マハーラージャー（大王）など第一次大戦に際してイギリスに忠誠を誓った地主達が多数含まれ、サハジャーナンドがドイツ人学者に言及したことは全く予期しない彼等の反感を買うこととなった。彼としては、第一次大戦に未ださしたる関心も抱いてはいなかったのである。彼はまたこのときの別の講演において古典に基づきながらブラーフマンにとって祭司の職は不可欠のものではないと論じて、ブーミハールにブラーフマンとしての自尊心をよびさまそうとした。この二つの講演には古典に拠って現実のブラーフマンの自覚を促す彼の姿勢が一貫している。そして、この大会参加を契機として、彼は古典を通じて自己だけの解脱を達する道から、心のうちひしがれた者の自信の回復への努力、「民衆への奉仕こそ神への奉仕」の道へと入っていく。

このような彼の社会奉仕観の形成を古典ギターの理解が助けたこともたしかである⁴⁹。彼がギターを生活の不可欠の一部としたのは、民族運動に身を投じ牢獄に入っていた1922年3月、小さなギターを差入れされたときである。註釈書を座右においてそれを頼りに読んだりあるいは何らかの原則を立ててその原則の投影をギターのなかに読みこむことをやめ、獄中でギターと直接に対面することによって彼は意味をつかんだといわれる。古典との直接的接触によって中間にまといつく紛飾を排除し、それが現実の批判的把握につながるという彼の思想の一つの特質をここにみることができる。

彼の社会奉仕は、当初ブーミハール・ブラーフマンの運動に注がれた。サハジャーナンドは、一方で文献の狩猟を通じて自己の主張を基礎づけようとしたが、同時にダルバンガー、バーガルプル、ムンゲールなどビハール各地を訪れ、ブーミハールと他のブラーフマンとの無数の婚姻事例を集め、また彼としてはブラーフマンにとって祭司の職は必要不可欠ではないと考えながらも調査の旅を通じてブーミハールが重要な場所で司祭を行なっている例を挙げて、ブーミハールが他のブラーフマンになんら遜色のないことを訴えた。ここには古典への依拠とならんで自己の足を通じて現実を確かめる経験主義的な態度がみられるが、やがてこの態度は社会における宗教の名においての打算を批判する姿勢へと連なっていく。例えば、1924年、彼がビハール州バクサルのパラフマプルで開かれた牛の市に際して牛の保護と屠殺禁止を掲げて反対運動をすすめたとき、これにもっともはげしい抵抗を示したのは市の取止めによる収入の減退を憂えるザミンダールや寺のパンデー（祭司）など本来もっとも牛を保護する筈のブラーフマンであった。

古典への依拠と経験主義とを媒介にして、彼の政治との断絶は次第にときほぐされていく。彼がバクサルの近くコートワーナーラーヤン村に住んで以来、パートナーの友人や信者達が英語を忘れるのはよくないからとサハジャーナンドのもとに英字新聞を送りはじめた。やがて、第一次大戦直後のインドの民族的自覚の高まりは彼の限られた視野を否応なく拡大していった。そしてガンディーの思想については未だ手さぐりの状態にありながらも、サハジャーナンドはガンディーの指導下の運動には抗しがたいものを感じはじめた。1920年12月5日、ガンディーとの初対面の機会がえられた⁵⁰。彼がガンディーに尋ねた質問の一つは、民族運動に参加しているムスリムの

学僧（＝マウラーナー）達の将来の活動にたいする懸念に発していた。彼としてはヒンドゥー・サニヤーシーとしての生活体験からくるマウラーナー達への疑問があったのであろう。彼の政治への入り方は、周囲の興奮とはやや異質の、ヒンドゥー・サニヤーシーとしての確かめながらのものであったといえる。この後、ナグプルで開かれた会議派大会（1920年12月）に出席して帰り、評議会選挙ボイコット運動に加わりハトッワーのマハーラージャーに投票しないよう村々に訴え、またガンディーのすすめる手紡機チャルカーの運動をもおこなって彼の政治活動ははじまった。

一方、ブーミハール運動もまた、民族運動への参加とともに彼の周囲の農村をみつめる眼を鋭くした⁶⁾。1927年、ビターに住むブーミハール・ブラーフマン、シーターラーム・ダースがアーシュラムを開いてブーミハールの子弟達にヴェーダなどを教えたい意向をもらした。かねてブラーフマンの師がブーミハールに教えることを拒否しているのに不満を抱いていた彼は、アーシュラムの管理者の一人として加わった。しかし、管理者のなかにはザミーンダールやその支持者達が多く、サハジャナーンドが農民運動との結びつきを強める過程で彼等はアーシュラムを去っていった。これよりさき、1926年のブーミハール連盟の大会においてザミーンダールその他が従来1アンナーの入会条件を年12ルピーの会員制に切換えようと試みたとき、サハジャナーンドはこれに強く反対している。このように、ブーミハール・ブラーフマンの運動は、彼の社会活動を導きだす要因となりながらも、宗教とカーストの名でおこなわれている地主層の運動の思惑と同一カースト内を横切る階級的亀裂を彼に認識させる。こうしてみると、サニヤーシーから農民運動指導者への道も決して唐突とはいえない。「激し易い」といわれる彼の性格の底には経験を抛り所としての冷静な判断と現実にたいする豊かな感受性とが隠されており、農民との接触が彼の行動の幅を拡大していったのである。

「註」 1) サハジャナーンドの伝記的部分については特に記さない限り

Swāmi Sahajānand Saraswati, *Mērā Jivan Sangarsha*, Bihtā, 1952（以下Iと略す）に依る。

2) I, p.159 f.

3) Girish Mishra, *Caste in Bihar Politics*, *Mainstream*, Dec. 7, 1963.

4) I, p.233 f.

5) *ibid.*, pp. 182—185.

6) *ibid.*, pp.285—295.

3 サハジャナーンドとビハール州農民組合運動

(1) 運動を通じてのザミーンダール論

サハジャナーンドが現実から隠遁したとき、隠遁へのひたすらの生活が伝統にあぐらをかくサニヤーシーへのきびしい批判をうみだしたように、現実の世界に戻りブーミハール・ブラーフマンの自尊心の回復にのりだしたとき、彼はブーミハールの運動をくぐりぬけて農民運動へと到達した。サニヤーシーとしての思想の同質性を保ちつつも、彼の思想が強い求心性をつねに伴ない

ながら外から内への定着を志すために、内側に巢喰っている矛盾を見逃がすことができなかったのである。

ザミーンダールの苛斂誅求についてのサハジャナーナンドの認識は、アーシュラムの垣根のなかでよりもむしろザミーンダールによって「遊覧旅行」と皮肉られた酷暑とモンスーンとをいともわぬ1930年代のビハール各地へのめまぐるしい活動の旅によって深められた。この活動の過程において彼の宗教・カースト観は訂正を迫られ、地主・農民の基本的対立の認識へと近づいていく。

ここにその若干の例をあげてみよう¹⁾。

1933年のある日、ダルバンガー地区マドッパニーの農民集会ののち、一人のマイティリー・ブラーフマンに属する農民が彼に訴えにきた。マハーラージャー・ダルバンガーのザミーンダーリーでは雨期の洪水にあっても水の流れをせきとめることができない。水を引けば魚が繁殖しないといってマハーラージャーが怒るからである。また、土地にたいする農民の権利は認めても彼の無知につけこみその土地に植えられた木についてはザミーンダールが権利を折半するため、農民は歯をみがくための枝を切ることも葉を落すことも自由ではない。インド真理大協会会長であるマハーラージャーもマイティリー・ブラーフマン農民の保護者ではありえぬことを農民の訴えは痛切に彼に教えたのである。

また、1935年5月のこと、プールニャー地区のベンガル州に近く、ムスリムの多いパーンジパーラーの集会は、ヒンドゥー・サニャーシーであるサハジャナーナンドの杞憂をよそに成功した。集会の後でムスリムの農民達はこれまでたくさんの話を聞いたがマウラヴィー（ムスリムの学僧）達はあなたのようにパンの問題を取上げなかった、一緒に自分達の村に行こうと誘う程であった。サハジャナーナンドは「われわれの生涯と彼等の生活において、ムスリム農民がわれわれのようなヒンドゥーのファキール（僧）を自分達の仲間と理解し、村の自分の家に喜んでつれていきたいと思うおそらく最初の機会であったろう」とのべている。「農民は結局農民である」という彼の理解は、農民が農民として解決を求めているという主体的志向をとらえてはじめて成立するものであった。

その農民をとりまく条件は、単に小作料の問題に限られなかった。コーシー河の荒れ狂うバールガルプル北部では農民はザミーンダールの狩猟に供するため農地から小鳥を追うこともできず、何年来農地が水につかっても小作料を取立てられるばかりでなく、その水に泳ぐ魚を取り、薬草を育てれば改めて水利料を払わされていた。また、プールニャー地区ダルマプルのパルガナーでは今は河川が乾上っていてもそこを渡るとガート（岸）とよぶ税をとり、タレース（英語の trespass をつづめたもので不法侵入の意であるが農民にはもとより言葉の原義は想像すべくもない）の名で農民は自分の土地以外に家畜をつなぐためにはザミーンダールやその使用人アムラーに贈り物をせねばならず、プナーヒーの日（サンスクリットのプニャーフが訛ったもので神聖の日の意。ザミーンダールは一年の小作料の取立てをその日から始めるので彼にとっては文字通り「神聖の日」）の祭の晩餐の費用（実際にはその数倍）を負担させられていた。

息苦しいしめつけにも出口はあった。ムンゲール地区バクティヤールプルではザミーンダールが塩・魚・燈油・皮革の売買を独占的に規制していた。1930年、インド政府の塩専売に反対しガンディーの指導のもとで全国的規模で展開された塩のサティヤグラハはここにおけるザミーンダールの塩独占をも粉碎してしまったが、農民運動はさらに残る三つの独占をも打破したのである。

しかし、農民が解決の方向を意識した農民活動家に接する道は平坦ではない。インド学者で農民活動家でもあったラーフル・サークリットヤヤーナのえがくガンガーパリヤーの模範的な会議派活動家ヤムナー・バガトと農民活動家との出会いの過程がそれを示している²⁾。彼の家は大家族制度のもとでポットをつくり、何世代にもわたって何ビガーかの土地をザミーンダールからえて耕作していた。ビハールで白日のもとに行なわれていたように土地査定のとときザミーンダールは自分自身の名前を小作人として書かせ、ただし今まで同様ヤムナーに耕作を続けてよいといひながら、その後は小作料の受領書も発行せず、彼の土地を奪い去り、家族は飢えに瀕してしまう。ヴェテランで誠実な会議派メンバーである彼は、会議派の仕事とあれば自分をさし措いても州の指導者ラージェンドラ・プラサードのもとにかけつけるようなタイプの人間である。不運にもザミーンダールは彼と同一カーストに属し、このコミュニティー内部では解決を望めないことを悟る。やむなく、彼は地区段階、そして州の会議派指導者のところにまで出かけたが彼の請願は聞き入れられない。ある日、赤いクルターを身につけた十人の農民活動家が彼の村を訪ねてきた。ザミーンダールは当惑したが問題の解決の端緒がここに開かれる。旧来の共同体的問題解決方式であるカースト会議に一度は頼ろうとしてその果しうる役割の限界を自覚し、新たな希望の灯とみられた「農民組織」会議派に訴えてこの組織も彼にとって死活の土地問題の解決には力を貸さないことを悟った末に、農民活動家との出会いとなる。従って、農民活動家にはカースト的意識や会議派的な民族意識を克服しうるような新たな視点の設定が求められていたのである。

サハジャナーンドは、ビハール農民に困窮を強制している要素として、(1)ザミーンダーリー制、(2)負債、(3)無規律で混乱した市場、(4)砂糖工場主の無法と貪欲、(5)訴訟、(6)社会慣習の悪弊、(7)文盲とをあげている。彼によれば、ビハールの5310万エーカーの土地が3500万の人口中のわずかに50万人のザミーンダールによって所有され、しかもこのうちの数千人の不在地主が約5000万エーカーの土地を掌握し、「ただ坐って農民を抑圧する手段を編みだす以外何もしない」地主が耕作者からの合法的支払いのうち1500万ルピー強を政府に渡すだけで、残りを自分の手中におさめている。この他、ザミーンダールは、利子、サーラーミー（土地譲渡手数料）から様々の非合法の賦課にいたる龐大な収入を得ていた³⁾。1936年11月、プーリーで開かれたウトッカル農民会議において彼は「もしも今日、誰かがまず第一にザミーンダーリー制を廃止するか、イギリス帝国主義を廃止するかを尋ねるならば、私はまずザミーンダーリー制の廃止をのぞむといいたい」と発言している⁴⁾。この発言には会議派の「民族統一」論への批判がこめられているといえよう。

彼のザミーンダール論が詳細な体験の記録と天を突く怒りにあふれているのにたいし、のちに

ふれるように、彼の農民観は極限に近い素朴さをたたえている。農民各階層を詳細に分析し、農民を歴史の複雑な諸矛盾のなかでとらえることは彼のよくなしうところではなかった。彼が会議派社会党指導者によって農民主義者として批判されたことは理由のないことではない。しかし、真のサニヤーシーとなるために政治の世界に入ったという彼が人間の本来の姿をもっとも素朴な形で想像し、それを歪める制度に怒りをあらわにしたとしても当然のことといえるかもしれない。

「権利が奪われようとしているか、すでに奪われた者が準備してその権利を取戻すこと——これが私の知っている自由の闘争と真の社会奉仕の秘訣である。」⁹⁾

権利の回復とは人間の本来の姿への回復であり、彼はこれを素朴な農民像に二重写しにしていたのであろう。

(2) 農民運動と農民——1930年代前半

1927年末（正式発足は翌年3月4日）にサハジャナーナンドが西パトナー農民組合を創立したとき、彼は農民組合運動の将来について確かな見通しをもっていたわけではなかった。

西パトナーにはバラトプル、ダルハラーなどの古いザミーンダーリーがあり、1921年、第一次非暴力抵抗運動に際してはパトナーからきた有名な会議派指導者達もザミーンダールの息のかかった者によって牛糞を投げかけられる有様であった。ダルハラーでも無償労働がおこなわれていた。ダンダー（杖）が黙って家の入口に立てかけられると万事さしおいても農民は明朝ザミーンダールの所に出頭しなければならない。ある家で杖がたてかけられたあとで一人の老人が死んだ。翌日、慣習に従って家人全部が遺体をガンジスの岸に運ぶためにザミーンダールの屋敷に出向くことができなかったとき、ザミーンダールの逆鱗にふれて全村が打ち壊しの懲罰にあった。ザミーンダールのこのような暴力を知りつつも、この段階でのサハジャナーナンドは地主と農民の内輪もめで独立闘争が弱まることを怖れて両者の和解をめざす立場に立ち、ガンディーを彼の道の先導者としてみなしていた。

1929年11月、ソーンブルの有名な動物市の機会にビハール州農民組合が設立されたが、その構想を練ったのは、サハジャナーナンド、ヤムナー・カールピー、ラームダヤール・シンの三人である¹⁰⁾。主な会議派メンバーが農民組合員として名を連ねてはいたものの趣意書に署名し組合費を払う積極さはなく、事実、組織としての州会議派委員会は農民組合への参加に反対であったし、会議派領袖ブラジャキショール・プラサードはあからさまの敵意すら示していた。未だ農民組合の正体もわからない当時とすれば多分にバスに乗遅れまいとする気持が多く、多くの会議派メンバーを駆って農民組合に参加させていたにすぎない。しかし、当時グジャラートのバルドーリーで反地税運動を指導してサルダール（指導者）の冠称をえたパッラブバーイー・パテールが会議派ラホール大会をまえにビハール入りをしザミーンダーリー制廃止を高らかに謳っていたが、前以て各地に農民組合をつくって彼の旅行の便宜をはかったのはこれら農民指導者であり、農民組合が会議派のイデオロギーによって強く規定されていたことはたしかである。

サハジャーナンドは1930年の「塩のサティヤグラハ」に参加して投獄された。ここで彼は獄中のガンディー主義者達の無規律に辟易し、会議派からもそして政治とかかわるが故に農民組合活動からも一時退いてしまう。しかし、会議派指導者の殆どが獄中にある間隙についてイギリス政府はダルバンガーのマハーラージャーなどザミーンダール層とはかり、ラージャー・スールヤプラールを書記として「全階級」的な統一党を結成して会議派に対置させ、加えて政党の「大衆活動」の基礎としてビハール地主連盟の支柱サチーダナンド・シンハらの肝入りで「農民組合」が1933年に設立された。この計画はヤドゥナンダン・シャルマーなどがサハジャーナンドを農民運動の場に呼戻すことによって粉碎された。これを契機として、サハジャーナンドを議長とするビハール州農民組合は再生する。政治と農民活動からの隠遁を断ちきり再び現実をたいする以前にまさる積極さがサハジャーナンドの内部に回復し、彼としてもっとも意欲的な1930年代の農民活動がはじまる。

1933年7月15日から約10日間、モンスーンについて農民組合は、ヤドゥナンダン・シャルマーの生地であり、ラージャー・アマーワーンのザミーンダリーであるマジャーワーンを含むギャー農村の調査活動をおこない、サハジャーナンドはラージャー・アマーワーンとの面接を通じて、もはやザミーンダールとの話し合いによる和解に希望を託せないという結論に達した。

1934年以降、ビハール州農民組合は単位組織を次第に整備していく。サハジャーナンドの疾風の如き農村活動はこのような農民組織の網の目を通してこそ可能となった。この農民との接触の旅を経済的に支えていたのは農民の援助である。彼の主張によれば、農民組合には常設の資金があってはならない。中産階級の機関は資金なしには活動しえないが民衆の機関の真の資金は民衆の全幅の信頼と愛であり、〔旅費はその時々々の農民の援助によって賄なわれるべきであるという⁷⁾〕。彼はかつてサニャーシーとして同僚の奢侈にあきれ、第一次非暴力抵抗運動の時期にはティラク自治基金運動のためサハジャーナンドらが炎熱をこらえて農村を歩いて集めた金を杜撰に使用する会議派メンバーの安易さに驚いた。また後年、第二次大戦中獄にあったときある会議派社会党指導者が会議派は闘う用意がないので労働者・農民の政治組織、全政党を糾合する統一政党を結成しようと話をもちかけた際、サハジャーナンドがまず問題としたのは、短兵急の計画もさることながら大規模なプログラムとメンバーのための資金の調達を貧しい農民がなしえない以上外部に資金的に依存せざるをえない組織の孕む危険性であった。彼の資金論には経験に裏付けられての寄生的「活動家」の跋扈をたいする警戒や、大衆組織がその財政的基礎を通じて大衆組織でなくなることへの懸念があった。

彼の組織論における慎重さはプログラムとしてのザミーンダリー制廃止要求における慎重さに連なっている。彼は、1934～35年の段階におけるいくつかの会議でザミーンダリー制廃止決議を提出した者の殆どが農民組合に加入したばかりの者で、当時まで農民組合に敵対的であったかその後これを離脱したメンバーであると指摘している⁸⁾。サハジャーナンドとしてはすでに無償廃止論に立ちながらも、運動と決議のずれに乗じようとする人々に隙をあたえることを避け、

決議を運動の成果の延長線上におこうとしたのであろう。

1935年4月、バットラブバーイー・パテールを議長にアラーハーバードで開かれた農民会議はザミーンダーリー制廃止を決議した⁹⁾。この会議は公式には連合州農民活動家の会議ではあったが、実際には多くの州から会議派メンバー及び農民活動家が参加していた。しかし、1929年ビハール農村でザミーンダール怖るるに足らずと説いたパテールは30年代後半には農民運動規制の立役者としてあらわれてくる。

一方、同年11月、ハージープルで開かれた第三回ビハール州農民会議でもザミーンダーリー制廃止が決議された。この直接の契機となったのはその直前に開かれたダルマプル・パルガナーの農民会議がザミーンダーリー制廃止の決議をし、ビハール州の農民指導者を刺激したからであり、この会議の議長となったのは1937年に成立したビハール州会議派政府の首相シュリー・クリシュナ・シンハである¹⁰⁾。しかし、州政府成立後この会議派指導者の眼に農民は「暴徒」として映りだす。

ザミーンダーリー制廃止決議は、あくまでその具体性において検討されねばならない。

この頃の反ザミーンダール闘争の成果について、ガヤー地区農民組合の1936年報告書は次のように伝えている¹¹⁾。

「農民組合が結成されてから、野菜、ミルク、ダヒーをザミーンダールが金を払わずに農民から奪う件数はかなり減少した。農民は怖れなくなった。いくつかの場所ではザミーンダールは道路・橋・井戸・貯水池などを修理した。圧迫や脅迫は規制された。一般的に言えば、ドゥムラーンオやスールヤプラーをのぞけば他のザミーンダール地域ではアブワープ（非合法の賦課）の取立ては半分になった。非合法の支払いを抑えられた。もっともいくつかの場所では脅迫によって非合法の謝礼が暗黙のうちにとられてはいるが。」

(3) 農民運動と農民——1930年代後半

1935年統治法にもとづく州議会選挙（1937）に際して、サハジャナーンドは立候補のすすめを断わり民衆のあいだでの活動を選んだが、立候補者の選択規準として彼は三つの条件を掲げた。

- (a) 会議派と国のために獄に入り、罰金刑等の苦痛を十分に味わっていること
- (b) 貧しい者またはその擁護者
- (c) 農民組合員

彼は(c)の条件を満たせなければ(a)(b)の条件を満たすこと、しかし(b)も満たせなければ少なくとも(a)の条件を充足させることを求めた¹²⁾。彼の議論にはコミンテルン・テーゼをてことして統一戦線論を繰りひろげる会議派社会党の理論家の歯切れの良さはないが、この三条件の基準は彼の経験に根ざした独特の統一戦線論といえることができる。だが、彼の規準が州会議派に生かされるすべはなかった。しかし、さしあたり民族組織としての会議派の地位を承認することによって、ザミーンダールが会議派候補者であっても会議派への投票を農民に依頼することは選挙後への一定

の約束を前提としてしか可能ではない。そしてこの苦い選択は彼の農民活動家としての立場を引下げられないものとした。会議派の候補者は選挙の興奮を忘れることはできても農民はサハジャーナンドの約束を忘れることができないからである。そこからサハジャーナンドの会議派の体質にたいする痛烈な批判はうまれる。

「州の会議派指導者の大部分は、農民の深刻な経済問題にかんして自分の心を表明することを怖れている。……彼等は農民を自分達の民族運動の背後におきたがってはいるが、農民の当面する真の問題にはぶつかりたくはない。彼等にとっては、自分達の求めに応じていつでも獄中に入る用意があり、農民の階級的利益の立場でつぶやきあるいは考えることなく、手織綿布を着て、選挙に際しては会議派のために投票するような農民が、戦闘的な農民より望ましいのである。」¹³⁾

農民を民族運動の背後にではなく主体に据えようとしたサハジャーナンドの州議会選挙についての論評は次のようなものであった¹⁴⁾。

「中央議会あるいは地方上院については、会議派の候補者のいずれもが反動及び金満家に対決して成功を収めることはできなかった。というのは選挙民はザミーンダール、高利貸及び社会の上層から構成されていたし、農民と貧しい者は自分の気持を表現する機会がなかったからである。下院においては、一、二の例外を除いてすべての会議派の指名者が莫大な資金をもつ競争者をこっぴどく敗北させた。」

勿論、州議会選挙の投票権は全農民に与えられていたのではなく比較的豊かな農民に限定されていた。サハジャーナンドが投票権が全面的に解放されていないという事実にはではなく、むしろ農民がいまや投票権をえている事実に重心をかけて論ずるとき¹⁵⁾、それは投票権を行使しうる農民、そして農民運動に積極的に参加した農民の階級的構成にかかわっているものといえる。同時に、会議派の勝利を支えたものは単に投票の権利をすでに持つ者に限られずひろく農民の変革への欲求であったろう。その意味でも、サハジャーナンドの苦い選択は選挙において完了することではできず、「すべての閣僚を農民と人民の意志に向けさせる」ために大衆を組織し、地代・地税の滞納額の縮小、地代・地税の実質的削減、すべての負債の削減または棒引きという農民の要求を会議派政府に実現させようとした¹⁶⁾。

しかし、会議派への期待も空しく法的な解決ルートを失った農民はサティヤーグラハによって自己の権利を自らの手で擁護しようと試みた。1929年恐慌による農産物価格の暴落にも拘わらずザミーンダールは飽くなき小作料取立てに加えて小作料滞納を理由に長年耕作して小作権をえている土地、いわゆるバカーシュトランドから農民を追立てて、あらためて随意小作人との契約に切換えていった。これにたいし、農民組合は農民に権利意識を目覚めさせ、農民はザミーンダールが合法的に土地を取上げたのでない限り承服できないとして土地を占拠し続け、ザミーンダールが刈取りあるいは耕作に派遣する雇人達を拒絶した。このバカーシュト・サティヤーグラハは1936年にビハール農民の武器となり、37～38年にかけてその件数が増大した。この段階においてはビハール州農民組合は個々のメンバーが指導に参加する形をとっており、ザミーンダールが

会議派との妥協によって勢いをえ、また彼等が会議派政府の用意したバカーシュトランド取戻し法をつぶす目的で全州にわたって追立てをすすめるにいたって、農民の期待はついに組織としての農民組合に寄せられた¹⁷⁾。

1938年末、ガヤー地区レーオラーの農民は農民指導者に陣頭の指揮を切実に求めている。ヤドゥナンダン・シャルマーの要請で出かけたサハジャーナンドはそこで5万の農民の老若男女の集まりに接した。この後、パトナー地区農民会議の席上、彼は「農民の直接闘争を指導しなければわれわれは講釈好きとあきられよう。講釈と決議は読み書きできる人のためのものであり、彼等はこれにあきることはない。だが、民衆は仕事をし、語ることは少ない。今や彼等に仕事を与えることがわれわれの責務である」と訴えた¹⁸⁾。切実な土地問題の猶予のない瞬間において農民そのものが農民指導者を動かしつつあった。こうして、レーオラー・サティヤーグラハは開始された。ラーフルの指導したサーラン地区アムワリー（詩人達は運動のすさまじさを『血がラーフルの頭から』でうたった）、カールヤナンダ・シャルマー（のちの全インド農民組合理長）の指導したムンゲール地区バルヒヤー・タールの他多くの村でバカーシュト・サティヤーグラハが平和的 direct 闘争の形ですすめられた。

サハジャーナンドに課せられた任務は個々のサティヤーグラハの指導と共に各地の運動を調整し、新たな段階へと運動を前進させることにあった。農民の勇気・冷静さ・階級意識の目ざめを感じとったという彼の心にはいくつかの教訓が刻みこまれた¹⁹⁾。

その一つは、闘争をはじめてから休戦の交渉をしたときにその隙をつくザミーンダールや官憲の巧妙さと彼等にたいする徹底抗戦の必要であった。彼は「一般的に、闘争をはじめて以後休戦のわなに陥ってはならない。たとえ敗れてもその場合には敗北によって利益を与える。何故ならば、自分の弱さを知るからである」と論じている。こうしてサティヤーグラハの後半段階においては優秀な活動家を獄中に失なう不利を避けるため法廷闘争をも併用した。

第二に、彼は農民運動の基礎を活動家の創意と農民の可能性への信頼に求めている。

「もしも積極性と信念とをもって活動するならば、金・食糧・人材の欠乏で活動が止むということはない。この三者は農民が用意してくれる。しかも容易に。われわれの大きな誤ちはわれわれが民衆の闘争を外部の金と人材によって勝利したいということであり、そのような勝利はたとえ得られても私は敗北と考える。何故なら農民はそれによって自信をえられないし、その自信こそが闘争の真の目的なのである。いま外部の力によってえられている権利はいつかは奪われる。もしもわれわれ、指導者の側に信念と積極性とがあれば、農民はすべてをなすうるし、たとえ飢えようともわれわれを援助することができるのをみた。この信念がなければわれわれはきっと敗れることも経験した。」

農民の可能性を活動家の創意がひきだすところで運動が出発し、農民が自力を基礎とした運動の過程のなかで自信を蓄えていくという彼の発想は、やはり農民運動そのものが生みだしたものといえるであろう。サハジャーナンドの素朴な農民像は、農民を静止した形でとらえるという意

味で素朴であったのではない。

ところで、1930年代後半のビハール農民組合運動は、バカーシュト・サティヤーグラハのほか砂糖きび栽培農民の要求にも対応していた。1932年1月、インド政府は砂糖にたいする輸入関税を課した。この措置はインドの砂糖工業の発展がイギリス独占体の利益を損なわないという前提をふまえたものではあったが、これを機に東及び北インドに砂糖工業が発展しはじめた。サハジャーナンドのアーシュラムの所在地ビターにも1932年に砂糖工場が創立された。彼は外国人が来て工場を開くよりインド人のダルミヤーが来る方がはるかに良いと考え、工場の敷地を見つけるのを援助したりした。経営者は会議派の領袖ラージェーンドラ・プラサードを取締役の一人に据えて、工場は労働者の理想の住み家となると宣伝した。ところが、工場創立後まもなくサハジャーナンドは農民のグル（粗糖）製造を禁止しようとする工場側の企図に挑み、次いで農民が売る砂糖きびの価格の問題で争わねばならなかった。その後もハルタル（罷業）が行なわれるなどしたが、1938～39年の労働者のストライキは一旦失敗に帰しながらも活動家達の懸念をよそにサハジャーナンドが農民への信頼をてことして工場のピケティングを成功させた。彼が工場主への莫然とした期待感を離れる過程はザミーンダール・農民協調論からの離脱の過程に符合している。砂糖きび栽培農民の運動への参加を通してえた彼の結論は次のように直截である²⁰⁾。

「民衆のあいだで活動する者は民衆に、自己の目標に、そして相互に無限の信頼がなければならぬ。そのときに成功がえられる。私は農民に無限の信頼をよせている。その結果私には決して失望がない。彼等も同じように援助をしてくれた。」

彼の農民観はあまりに楽観的にすぎるかもしれない。しかし、彼が運動の成功の条件として活動家の農民にたいする信頼とならんで農民がその活動家を自らの眼で確かめ支援することをあげているのに留意すべきであろう。

ラーフルが目撃したチャンパーラン地区ハリナガルの砂糖工場のストライキに参加した労働者もまた会議派の目指す独立の意味を考える機会をえた。このストライキの要求は賃金の25%増額、労働組合の承認、待遇改善などであった。工場主は会議派メンバーであり、地区会議派委員会は工場内で会合を開いてこれらの要求を抑えようとし、これに従わぬ者を警官と警備員が殴打し、冷水を浴びせ、馬が踏みつける²¹⁾。この状況が会議派の「州自治」のもとで現出しているとき、独立のイメージが変ってくることも必然であろう。

サハジャーナンドは独立の意義について次のようにのべている²²⁾。

「農民組合と農民自身にとっては、ザミーンダールと農民の独立は二つの相反するものであるが、会議派にとっては何ら相違はない。したがって、農民組合と会議派の相違はアプローチと物のみかたそのものにあり、それ故に基本的である。

……ザミーンダールと金満家にとってはそれ（経済的・政治的圧迫からの大衆の完全な解放の闘争…訳註）がなくてもよい。だが、農民と労働者はそれなしには生きられない。この自由を獲得することには自己のパンの問題が含まれている。」

(4) 1930年代末の政治情勢とサハジャーナンド

1937年の会議派州政府の成立は彼にとって思想の屈折点となった。農民への信頼を基礎とする独特の農民像を築きあげ、虐げられた農民を歴史の主体としてとらえなおし、農民の無限の可能性に行動の原点をおこうとする彼の思想は、農民組織を自認しながらも農民からの全権委任を求める会議派の農民観との対決のなかで、しかも30年代の農民運動に自ら身を置くなかで深められたものである。サハジャーナンドは、大衆運動の指導体としての機能から急速にずり落ちていく会議派への警鐘を鳴らしつつ、権力志向的な会議派の対極に素朴な農民像を据えようとしたのである。

しかし、彼のこのような農民像は、現実のビハールの農民運動それ自体がもっている矛盾を克服し、真の意味での農民解放をもたらさうような視点を準備していたのであろうか。バカーシュト闘争の同僚カールヤナンダ・シャルマーは、独立直後のビハールについてとくに農業労働者の比率がここ数年のうちに30%から45%に増大した事実に着目して次のような階級分析を試みている²³⁾。

まず、ビハール農民の35%はそれぞれ10エーカー以下の土地しかもたず、自ら働く貧農である。自分の土地が生計に十分でないときバターイー（刈分小作）あるいは現金小作料を払って富農またはザミーンダールから土地を借りる。彼等は時々クリーとして働き、富農あるいはザミーンダールの牛車をひく。

農民の20%は10～25エーカーの土地をもち、中農を構成する。この範疇に属する大部分の農民は自分で働くが、必要な場合には何人かの農業労働者を備っている。

第三のカテゴリーは富農とザミーンダールである。彼等は25エーカーから数千エーカーに及ぶ土地をもち、70%の農業労働者はここで働いて無償労働その他の搾取に耐えている。

最後に、農業労働者は土地をもたず、その名に値する財産もなく、「封建的」で低い賃金と高利の負債にあえぐだけでなく、その多くは不可触賤民として社会的圧迫をもうけている。かつてのような、食糧・衣類等の主人による保護も今はない。彼等の生活を「改革」「改善」しようとする様々の試みも、腐敗した利己主義者やコミュニストの渴望をいやすだけであったり、問題のすりかえであったりした。シャルマーは農業労働者の地位の改善によって彼等の助けをときにかりる中農も利益をえるが、ことに富農が農業労働者に賃金を払うことをさけるためバターイー、マンフンダーその他の刈分制度によって貧農に土地を貸して彼等を搾取しているの、貧農と農業労働者は共闘することによって自己の生活条件を変えうとしたのである。

シャルマーによれば、ビハールの組織的農民運動が土地を求め、法外な賦課に反対して1939年にはじまったとき、農業労働者は農民を支持した。しかし、のちに土地の分配と農業労働者の賃金の増大が問題の前面に登場すると、農民は農業労働者の要求に反対しはじめた。農民組合もまたかなり富農と中農の影響下にあったので農業労働者の要求を支持せず、その結果、後者はときに農民と共闘することはあっても農民組合に無関心になっていったといわれる。そして、1948年

現在、彼等は農民組合と農民組合活動家を殆ど信頼せず、共産党に期待を寄せてはいるが、党もまた明確な行動のプログラムをもたず、農民組合が未だ富農と中農の影響下にあることを認めたのである。

サハジャナーナンドの農民論がなによりも運動論と不可分であった以上、彼の描く素朴な農民像の世界は、会議派の農民観に対決し苛烈なザミーンダール批判を展開しながらも、1930年代のビハールの農民運動のもっていた矛盾を同時に背負い続けたように思われる。

農民層自身の複雑な構成にたいする対処とともに、サハジャナーナンドが1930年代末のインドの民族指導のあいだでの論争・角逐にどのような態度を示したかを探らなければならない。1939年3月の会議派トリプリー大会を中心としてガンディーの威信においてスパーシュ・チャンドラ・ボースを再選された議長の座からおろした会議派右派の権謀術数、これをめぐる会議派社会党の妥協、左翼政党間の「相互不信」という「政治的汚濁」²⁴⁾は、サハジャナーナンドを驚きと失意の極におとし入れ、彼に政治を忌避させ、孤立した農民の世界にとじこもらせようとした。そして、このような彼の考え方は「純粹経済主義」として非難された。1939年というビハール州農民運動の試練の年において中央の政治の舞台で展開された一連のドラマが彼の思想に喰入った疵痕は誠に大きいといわなければならない。それは彼を徹底した反ガンディー主義の故にボースに近づいただけではない。1940年1月にサハジャナーナンドと会っているラーフルの次のような観察は痛烈である²⁵⁾。

「スワミーजीはつねにヴェーダーンタ、隠遁及び個人主義に陥っていた。しかし、彼は民衆の悲惨な生活との接触があったときには、天から地におりて全力をつくして虐げられた農民のために活動する。しかし、同様に彼の気分が外から退いて内面に向うとき、彼は忘却して、個人主義者としてあらわれてくる。光と影のように彼の生活はこの二つの形においてつねにあらわれてくる。にも拘わらず、彼の怖れを知らぬこと、熱烈さ、誠実さにかんして誰が疑うことができようか。」

サハジャナーナンドの農民論も、サニヤシーの世界観を克服できず、むしろそれは彼自身の思想的危機に際しての安らぎの世界ともなっていたのであろうか。彼は農民活動に入った動機を次のように説明している²⁶⁾。

「そもそも一介の托鉢僧に過ぎぬ私が何ゆえこのような仕事をはじめたのであるか。哀れにもぼろにつつまれた死人が火葬場へ運ばれて行く有様を眺め、生前幾百万の人々のため食物を生産して来たこの男が死体を掩う衣服すらもたぬ事実に私はふかく心をうたれたのである。私はこの不正を目撃して断腸の思いを味わった。神、人を養うというが、そんなことはどうでもよい。とにかく農民が嘗々辛苦して作った収穫物は幾千万の人々の口に入るのだ。私にとって農民は神の資格を有ち、私は農民のために尽くして神につかえることを誓った。つまり、富の生産者が飢えているのに、地主の犬がびろうどの上に寝るような社会秩序を根絶しようと欲したのである。」(キーサンを農民と訳しかえ、全体を現代かなづかいに改めたほかは原訳のまま)

サハジャーナンドが社会の虚偽の層を一枚ずつはがしていくとき、最後に到達したのがもはやめくりようもなく、社会を支えつつも自らは肉体の限界まですりへられた農民であった。彼がサニャーシーの世界で求めようとした神は、彼が最初脱出をはかった現実の社会の農民のなかに認められた。かくて、神に仕えるサニャーシーと農民に仕える活動家は同一線上で考えられ、その中間にまとりつく虚飾が排撃された。彼の描く農民像は素朴で、善意で、可能性にあふれた農民の像であり、それは、いわば、彼が常に戻っていくべき原点であった。

しかし、彼が1930年代末の政治の醜悪さにあき、自らつくりだした農民像の世界にこもろうとすると、現実を濾過してしまった一元的な農民像の世界は彼の心には安らぎを与えても、現実の農民の課題は依然として残されたままとなる。そしてまた、動いている農民にたいする積極的共感こそが1930年代の彼の思想の生命であったとすれば、30年代末の彼には深い挫折感が伴ったのである。30年代の疾風怒濤に代って屈折した思想の展開がその後の彼の内面に映しだされるのもこのためである。

ここにサニャーシーからガンディー主義者、そして農民運動家という道をたどったサハジャーナンドの「光と影」をみるのであるが、同時に、30年代後半において豊かな国際感覚と土壌的なマルクス主義を誇った会議派社会党との彼の不幸なかかわりをも指摘せざるをえない。ビハール州農民組合運動の指導に参加していた会議派社会党の執行部は、州農民組合を讃え、「会議派にたいする統一戦線の一貫した政策を維持しながら同時に独立した農民運動をいかに展開させるかの理想的な例を提供した」とのべている。1930年代、インド共産党は、会議派社会党との「社会主義者の統一」政策のもとでビハール州出身で社会党書記長である J・P・ナーラーヤンへの配慮のためであろうか、ビハールにおける共産党支部の結成を遅らせていた。ラーフルは社会党指導者マサーニーの反共政策に疑問を抱いてはいたが、それはマサーニー個人の意見であって党の政策ではないというナーラーヤンの説得もあって、1938年会議派社会党に入ったのである。個人としては共産黨員となっていたラーフルがムンゲールで共産党ビハール州支部結成に加わったのは1939年10月19日のことである²⁷⁾。この遅ればサハジャーナンドをより深く会議派社会党とかかわらせたのであるが、会議派との分離の緊張を内包する農民運動が反会議派にならないよう努めるのに精一杯の会議派社会党には、マルクス主義の原則を現実のなかで問う余裕も現実の運動経験を普遍化する能力もなく、サハジャーナンドの農民運動家としての経験を原則からの逸脱としてしかとらええなかったのである。こうして、サハジャーナンドの反会議派的農民運動論の視点は、本来クッションたるべき会議派社会党をとびこえて、政治にたいする全面的不信へと連なったのである。彼はビハール以外の数州の農村を旅行した経験から「農民はいたるところ用意ができてい」るにもかかわらず活動家の側に農民にたいする信頼がないか、会議派やその他の政党活動にまきこまれて時間のない状況、そしてことに農民組合活動において社会黨員よりも共産黨員がはるかに関心と積極性を示している事実を指摘していた²⁸⁾。

1939年の政治的経験に加えて、第二次世界大戦は一層深い思想的衝撃を彼に与えるのであるが、

それにふれるまえに、彼の農民運動論をひとまず整理することが適当であろう。

「註」 1) サハジャーナンドの足で歩いたザミンダール論については

Swāmī Sahajānand Saraswatī, *Kisān Sabhā kē Sansmaran*, Ilāhābād, 1947 (以下Ⅱと略す)。

2) Rāhul Sāṅkṛityāyana, *Jivan Yātra*, Bhāg 2, Ilāhābād, 1950, p. 526.

3) *Congress Socialist* (以下 C.S. と略す), Dec. 26, 1936.

4) C.S., Dec. 5, 1936.

5) I, p.170.

6) II, p.10.

7) *ibid.*, pp.95—96.

8) I, p.420.

9) H.D.Malaviya, *Land Reforms in India*, New Delhi, 1955 (2nd ed.), p.58.

10) II, pp. 76—78.

11) C.S., Jan. 22, 1938.

12) I, p. 480.

13) C.S., Dec. 26, 1936.

14) C.S., Feb. 20, 1937.

15) I, p. 470.

16) N.G. ランガー, サハジャーナンド, B.P.L. ベーディー, ヤーグニクの共同声明. C.S., April 3, 1937.

17) C.S., May 7, 1939.

18) I, p. 519.

19) *ibid.*, pp. 526—527.

20) *ibid.*, p. 461.

21) Rāhul Sāṅkṛityāyana, *op. cit.*, pp. 498—499.

22) C.S., June 5, 1937.

23) *People's Age*, Sep.5, 1948.

24) I, p.540.

25) Rāhul Sāṅkṛityāyana, *op. cit.*, p. 543.

26) レオナルド・シフ著, 国際文化協会訳『現代印度の構成』1942年 27頁。

27) Rāhul Sāṅkṛityāyana, *op. cit.*, pp. 537—538.

28) I, p. 540.

4 農民運動の思想

(1) 農民と農民奉仕家

ナンブーディリパードは、ガンディーにとって政治というものが「民衆のもっているすべてのものに共感をもった、無私^{キーク}の、人民への奉仕者という問題であった」と論じている¹⁾。サハジャーナンドにとっても、社会奉仕^{キーク}の概念はそのようなものとしてとらえられていたのであろう。にも拘わらず、サハジャーナンドは何故ガンディーとガンディー主義に訣別しなければならなかったのであろうか。彼にとって、ガンディー主義とはガンディー及びガンディーに従いあるいはガンディーを利用する活動家の思想と運動の総体をさしている。彼はガンディーの発言からガンデ

イーの思想あるいはガンディー主義者の本質を抽出する作業を試みるよりも、運動過程そのものにおいてガンディー及びガンディー主義者に相対している。彼がガンディーと恒久的に訣別したのが、1934年1月北ビハールを襲った大地震にうちひしがれた農民にたいする救済運動の方法についてガンディーと面接したときであることは象徴的である。

約二万人の生命を奪ったといわれる大地震を、ガンディーはすべての者を平等にこの世に送った神が社会のうみだした不可触賤民制に課した罰であると説き、この制度の廃止を農民に訴えた。それとともに、彼は真に援助をうけるべき被害を蒙った者のみが援助をうけとるべきであり、しかも援助は必ず労働によって償うこととして、労働なしに金を受取ることは盗みであると古典ギーターを引用して農民に語りかけたのである²⁹。人間の完全な平等と労働の尊重とは、ヒンドゥー的社会通念を揺るものであろう。この二つをしたがえてガンディーは「村から村へ裸足で歩き、慰めたり、教えたり、説いたりした。」³⁰

ガンディーのこの旅は、農民の考えをどのように揺りえたのであろうか。当時、ビハール農村では、ザミーンダールが「貧しい者共は食物をえるとわれわれのために働きはしない。地震は彼等を働かせる絶好の機会だ」とうそぶいていた⁴¹。このような機に乗ずる点ではビハールの大ザミーンダール、ダルバンガーのマハーラージャーも例外ではない。サハジャーナンドは農民集会を開きアジテーションを行なわない限り農民の状態は改善されないと考えた。しかし、活動家のすべてが救援の仕事に携わっている状況のもとでは救援運動者のなかから活動家を引出す以外にはなく、その旨を中央救援委員会のラージェーンドラ・プラサードに相談した。自己の一存で決めかねたプラサードの示唆でサハジャーナンドはガンディーに面接した。

サハジャーナンドの記す面接の記録は次のような内容である⁵¹。

ガンディー 「条例のため集会は開けない。」

サハジャーナンド 「開いて政府がとめるかどうかみましょう。」

ガンディー 「秘密ではなく、通知を出して。」

サハジャーナンド 「ええ、通知を出し、しかも大量に配布しましょう。」

ガンディー 「本当の不满を出すように。」

サハジャーナンド 「どうして嘘を。誰も目をつむることのできない程の真実ではないですか。」

ガンディー 「しかし、すべての不满を調査して発言するように。」

サハジャーナンド 「活動家が調査して話すでしょう。」

ガンディー 「彼は誤ちを犯すかもしれない。」

サハジャーナンド 「無数の不满があるのです。そのような心配のために自分で調査することなどできません。そんなことでは農民に利することはできません。活動家を信頼する必要があります。」

サハジャーナンドがマハーラージャー・ダルバンガーの名をあげると、

ガンディー 「マハーラージャー・ダルバンガーが知ればきっとそれを解決すると信じます。ギリンドラモハン・ミシュラさんが彼のマネージャーです。この人は会議派メンバーです。」

サハジャーナンド 「様子をみましょう。」

ガンディー 「騒ぎたてることをせずどの農民にどのような困難があるかをいちいちあげる必要があります。」

サハジャーナンド 「いつでもそうするわけにはいきません。二、三の農民の名前を知れば彼は農民の困難を解決するどころかいかなる農民もいささかも不満をいえないようにこらしめるに違いない。私はザミーンダールの手管をよく心得ているのです。」

農民の不満の完全な調査、その不満の完全な公開、ザミーンダールにたいする説得への確信が、農民活動家のとるべき態度として要請されている。それはガンディーにとっては譲りえない線であつたろう。にも拘わらず、そしてサハジャーナンドの記述の制約を割引いたとしても、不可触賤民制廃止についての切々たる訴えにくらべて、ガンディーがある種のよそよそしさでサハジャーナンドに相對していることを否定できない。ガンディーは農民活動家の訴える現実に直接にはかかわることなくより深く農民をとりまく現実の地底を理解していたと解釈すべきであらうか。会議派メンバーをもザミーンダールの搾取機構の切離しがたい一部としている状況の論理とザミーンダールの暴力から農民を守る限りにおいて必要な運動の論理についてのガンディーの「無知」に大地震に次ぐ「精神的地震」⁹⁾のショックをうけ、サハジャーナンドはこのときガンディーから恒久的に離れるにいたった。

1934年、ガンディーは政治から「引退」した。この年、サハジャーナンドはガンディーをはなれ、ザミーンダールとの和解への期待を断っている。ガンディーの「引退」は決して文字通りに受け取るべきでないとしても、その意志を表明したことにはガンディーにおける農民の世界と当時の農民活動家における農民の世界とのずれが暗示されており、ガンディーは自らの世界での実践に専念することを自己の課題としたのであろう。

第一次大戦後インドの民衆が何故民族運動の舞台に主体として登場し、ガンディーが民衆の心に訴えたのか——ガンディーを1934年まで方向指針者として仰いだというサハジャーナンドはこれについて多くを語っていない。ナンブーディリパードの次のような歴史認識はサハジャーナンドにはみられない⁷⁾。

「ガンディーは農村の貧しい人々を民族運動に引きいれる上で、決定的役割を演じたのではあるが、彼ら農民が第一次世界大戦後の時期に示した驚くべき覚醒を、ガンディー個人に帰するのは正しくないであろうということである。というのはこの覚醒はインドならびに全世界を通じて起りつつあった歴史的発展の結果であつたからである。」

1922年1月、サハジャーナンドが会議派アフマダーバード大会に出席して帰リ投獄されて目撃

したものは、獄中規則も守らず労働もせずただわめき散らしてガンディーの教えに背く一群の自称ガンディー主義者達の放縦さであり、看守人の方がガンディー主義者に近いかわせる程であった。のちにサハジャナーナンドはこれを次のようにふり返っている⁸⁾。

「実際、われわれが何万人理想主義者となりその宣伝をしても、人々には事物を評価する自分のものさしがある。行動する彼等自身の方法がある。もしわれわれのいうことが彼等のものさにびたりとするならば結構である。その場合には、人々はその規律を守るだろう。しかし、ぴたりとしなければそれらの発言の権威の名において反対のことをするだろう。このように、人それ自身の道とは異なった道に彼等を歩ませようとする場合には危険がある。しばらくは、あるいは眼の前では、人々はあなたの示した道を歩くようにみえてものちになって必らず彼等は従来の道に戻ってしまうのである。」

これをガンディー論ないし第一次非暴力抵抗運動論としてみるとき彼の評価の一面性を感じざるをえない。この時期、民衆の参加はインドの民族運動の様相を変え、サハジャナーナンドが獄中にみた頽廃をも含む全運動過程のなかから新しい奉仕家の模索が行なわれたことも事実である。インドの歴史は戻ることのない一步を踏みだしたのであり、ガンディーの指導の意義はまさしくその一步へのかかわりにおいて論ぜられるのである。このような彼の評価の物足りなさにも拘わらず、彼はガンディーと民衆との一定のずれからガンディーに従う装いをし民衆指導者たることを自認するが実は「権威の名において反対のことをする」一群の人々の登場を鋭く指摘している。つねに運動論の観点からガンディーに従いあるいはガンディーを批判してきたサハジャナーナンドは、ガンディーの思想の内在的批判という点では問題を残してはいるが、一方で極めて有効な活動家論を展開しているといわなければならない。ガンディーの思想の特徴を宗教と政治との結合と規定したサハジャナーナンドの議論は若干の前提を必要としているとしても、彼の次のような批判は傾聴すべきであろう⁹⁾。

「宗教の名においておこなわれている悪弊を解決するためにどれだけ多くの宗教改革者が出てはまた去ったことか。しかし、悪弊は相変わらずである。改革者は改革の代りに一つの新しいコミュニティをうみだし、錯綜を一層複雑にしはじめさえしている。ガンディーの名において他の者のいうことには耳を傾ける気持もないコミュニティがうまれた。実際、宗教の特質は盲目的服従をうみだし、そこに隠れ家を与えていることである。論理の余地がそこにはない。」

彼の厳しい批判の集中砲火を浴びたのは、「“根拠地”を各所にもうけ、そこからでていき、そこにたちもどる運動方針」¹⁰⁾とは縁遠く、根拠地を安全な隠れ家に代え、開かれた世界との接触のなかでガンディーの思想の意味を問うことを怠り、まれにガンディー主義者としての示威を行なうことによって「奉仕家」をよそおう人達である。ガンディーとガンディー主義者とは異なるとしても、ガンディーと数億の民衆を結ぶ奉仕家の存在が必須であり、ガンディー自身その養成の必要を強調していたとすれば、サハジャナーナンドの批判は、ガンディー主義者論にとどまらず、ガンディーの指導した運動にもかかわっていたといえるであろう。

勿論、この活動家論についても、サハジャーナンドの歴史認識の弱さはその影を落している。獄中経験が彼に迫った反省は次のような形で整理されたのである¹¹⁾。

——新聞に書き、講釈をすることによっては民衆運動に倫理的変化はおこらない。それは何人かの選ばれた人々のあいだでだけ可能である。きびしい試練にかけて運動のメンバーとすることが正しい。そうすれば、これは現在は民衆運動ではない。しかし、やがて時を経れば民衆運動になるであろう。——

彼は獄中経験を通じて真の活動家の養成がどんなに困難な課題であるかを身にしみて味わっていたのである。農民運動の昂揚期にあっても「雨期の蛙のような」¹²⁾質を伴わない活動家の量的増大に疑問を抱いていた。しかし、第一次大戦直後における民族的抵抗への民衆の参加に彼が積極的意義を付与していないことは、やはり帝国主義と民族の問題についての彼の世界史的認識の弱さに連なっており、1930年代末の彼の思想的屈折を媒介する要因ともなっている。このようにみえてくると、彼の活動家論はガンディーが自伝でのべている発想と意外に類似しているようにすらみえる。1919年の大衆的サティヤーグラハの「ヒマラヤの誤算」を経験したガンディーは次のように反省しているからである¹³⁾。

「大衆的規模の市民的不服従を再出発させたいならば、その前にサティヤーグラハの厳格な諸条件を徹底的に理解した、試練に耐えた、心の純粋な志願者の一団を作っておくことが必要であろう。彼らはこれらのことを民衆に説明してやることができたろうし、また不断の警戒によって、彼らを正しい軌道からはずれないようにすることができたろう。」(傍点…桑島)

サティヤーグラハを経験した両者は共に試練に耐えた奉仕家＝活動家の養成に民衆運動の方向を探っているが、その奉仕の意味する内容もまた共通しているのであろうか。サハジャーナンドの農民奉仕家観をみるためにはさきにふれた彼の農民観にたちかえらなければならない。彼が奉仕家に求めたものは、貧しくとも可能性を模索する農民にたいする負の意識といえるかもしれない。彼の農民奉仕家観を示す一節を引用しよう¹⁴⁾。

「鉄道、自動車あるいは他の交通機関によってきらびやかに到着し、花輪を身につけ、指導者となり、崇拜され、情熱的演説をうってもこれを農民奉仕とはいわない。これでは商売か奉仕かわからない。それでは農民をあざむくことになる。10～20マイル足で歩き、泥沼でもがき、命をかけ、熱射と飢えにあっても自己のプログラムを達成し、農民の熱意を高め、彼等の闘争をおこない、彼等に道を示すとき、農民奉仕ということができる。これが奉仕の火の試練である。これを何度も通過するとき誰しも農民奉仕家となる権利がある。遠くの村から自分の家や仕事を離れ、農民がずぶぬれになりながら、あるいは熱射に焼かれて、あるいはまた寒さにふるえてやってくるのは、自分達のことについて話を聞かせてくれるだろう、闇にあって自分の道を見つけるだろうという期待感からである。しかし、話を聞かせ、道を示す指導者がそこにいないとなるとどうであろう。指導者は乗り物がなかったとか天候が悪かった等々の理由をあげる。しかし、農民がこれを知るであろうか。誰が一体、彼に天候が悪ければ集会はないとか彼(すべての農民)

は乗り物の用意をすべきだといったろうか。このようなことはまともに農民にいえるものではない。食物と水、あるいは金がこの活動のために彼等に求められ、これら貧しい人達はたとえ自分は飢えようともこれを提供してすらいるのである。このような場合、彼等を失望させ、集会に出ない権利がどの農民指導者、農民奉仕家にあるのだろうか。それは無責任な者の行為であるだけでなく、農民の利益にたいする侮蔑である。そのような状態では、農民運動は単なる商売にすぎない。」

奉仕家の試練の場は苦難を克服しての農民との接触に求められ、農民にたいする同情を自己の辛苦で伝えることができたとき、農民との対等の資格がえられる。試練をくぐった奉仕家に農民は日常の場での問題をそのまま持ちこむことができ、その対等関係において相互の交流が成立し、運動がはじまる。サハジャーナンドは新たに知った農民に接するとき「どんな命令ですか」という表現で話をはじめるとい¹⁵⁾。彼によれば「農民は私に命令を下す完全な権利があると思う。適切なときに私のいうことを信頼し、私のいうことを守るとき、別の機会に彼等は私にどうして命令を下すことができないか。もしも、彼等にこの権利がなければ彼等は どうして私のいうことを守るだろうか。何ら圧力や圧迫はない。ここには相互の理解がある。」

奉仕（セーワー）の概念は農民が奉仕家を動かしていくという側面を内包していたが、そのような概念の質的拡大はやはり農民運動そのものがうみだしたものと いえるであろう。ガンディーの名を語ってその反対の行動をする者への批判は、1930年代のビハールの農民運動の経験を通じて奉仕論を核とする農民運動論へと高められたのである。

(2) 農民運動と「非暴力」

奉仕の概念の拡大がそのまま農村における不可触賤民を含むもっとも抑圧された層の全面的解放の課題に連なっているかどうかについては、サハジャーナンドの農民観からみると疑問が残るであろう。これにたいし、ガンディーは1934年政治を離れて不可触賤民の向上の問題に専念することを明らかにした。この年のビハール旅行においても示されるように彼は不可触賤民制にたいする農民の考えを変えることをも目指していた。

ところで、サハジャーナンドの農民活動は1937年には地区会議派の妨害をうけはじめ、ビハール州会議派もアヒンサー（非暴力）への攻撃と民族闘争への障害という視点から支部組織の措置を支持し、追って会議派大会もまた原則的立場から農民組合を批判した¹⁶⁾。のみならず、ガンディーの主宰する『ハリジャン』誌は、1937年に成立したビハール小作修正法をザミーンダールと農民の「自発的な平和への意志」の表現としてとらえ、ガンディーのいう地主・農民相互の「信託」の実現方向への一歩とみなした。この論説は、さらに、ビハール州会議派委員会の決議を「穏当な決議」とであると指摘し、農民に奉仕しようとする会議派の大志を讃え、独立した農民組合の存在も必要なしと断言し、最後に、

「会議派には多くの活動がある。しかし、一つの、ただ一つの理想として完全独立の達成がある。あらゆる活動はこの目的に資するものでなければならない」

としめくくっている¹⁷⁾。この論説は、地域レベルで胚胎し成長しつつあった会議派の矛盾に完全独立の達成の名において目を覆い、また一方の極において会議派の農民奉仕の大志を讃えている。政治をはなれて不可触賤民制の問題に専念することの意義は、会議派の目指す「完全独立」と「農民への奉仕」をもっとも社会的に抑圧された層である不可触賤民の地底において問いなおすということではなかったか。『ハリジャン』誌編集長マハーデーワ・デーサーイの次のような会議派観のなかにはそうした苦悩を見出すことが難かしい¹⁸⁾。

「農民組合指導者が搾取者と被搾取者とよぶものは、共に現在すべての者を搾取する国家のもとにある。会議派は支配者＝搾取者の桎梏を打破する非暴力闘争においていわゆる搾取者と被搾取者を結合するという史上ユニークな運動を指導してきた。明らかに、農民組合活動家にとってこの非暴力の過程はひどくゆっくりした過程である。彼等は急速で暴力的な嵐を望んでいる。そうすることによって、彼等は自分の保護する者、そしてすべての者を破滅させるということを忘れて。」

ガンディー主義者による農民運動の「暴力」批判が豊かな現実認識によって支えられていたのであるならば、あるいは農民運動を有効に批判し、それを内側から発展させる論理となりえたかもしれない。しかし、1938年の初めの頃、ガンディーの敬虔な弟子とされているビノーヴェー・バーヴェーなどのガンディー主義者と会っているサハジナーナンドは、「調査して発言を」という自ら打建てた原則に彼等が背いていることを確認したのである¹⁹⁾。ガンディー主義者達はかつてサハジナーナンドに要求したように自ら調査する代りに「誤ちを犯すかもしれない」会議派の情報に信頼を寄せていた。ラージュンンドラ・プラサードは、当時のビハールの状況を「ダンダーの御説教によって州の各地に暴力的雰囲気ひろまっていることはこの地を訪ねてみた者ならば誰でも感じとることができる」と伝えていた²⁰⁾。不可触賤民の解放と労働にたいする価値観の転換という本来農民活動家や農民を内在的に変革する性質をもつ訴えが、農民の解決を求めている現実の課題をくぐることなく、インドの完全独立の達成という大義のもとに会議派の矛盾を容認するにとどまらず、会議派の大志を史上ユニークな事業として讃美するまでに昇華するとき、現実によって会議派の示す「現実」がガンディー主義者をも支配し、「暴力」論は「完全な調査」の代替的機能を果しているようにみえる。

ガンディーは、

「主たる問題は会議派を強化するために農民組合を望むのか、それとも弱めるためにか。農民組織を、会議派を掌握するために利用するのか、あるいは農民に奉仕するためにか。農民組合は、表面は会議派の名において活動する対抗組織か、あるいは会議派のプログラムと政策を実行する組織か、ということである。」

とのべ、農民組合が会議派を掌握しようとしているだけでなく、農民を誤らせていると憂えている²¹⁾。ガンディーとしては、会議派がもっとも広汎な大衆にかかわっている事実を立てて会議派に民族的統一のもとでの独立の達成を期待したのであろう。

それにしても、ガンディー及びガンディー主義者達は民族的抵抗の組織としての会議派の強化を他のすべての問題に先行させていたということを意味するのであろうか。

サハジャナーナンドはガンディー主義者の「暴力」論に次のように反迫している²²⁾。

「犬がパンを取ろうとすればきびしく鞭打たれることを思い知らされたあとで理解するように、ザミーンダールもまた抑圧をやめなければダンダーをうけることを思い知らされるべきである。あるいは、狂犬に追われた人間がダンダーの助けでのがれ生命を救うように、他のすべての手段が不成功に終わったとき農民は自衛の用意をすべきである。そうしてのみ圧制者は驚き悪行を慎しむ。非暴力は最良である。しかし、暴力は少なくとも臆病よりもよいとマハートマ・ガンディーもいっている。」

また、1938年5月にベンガルのコーミッターで開かれた全インド農民組合第三回大会でも議長サハジャナーナンドは、ガンディー主義者や民族指導者の一部が説く「階級協調論」を批判して、

「暴力を最小限にすることは疑いもなくわれわれの義務である。しかし、われわれが暴力を第一の問題とし、農民の組織の問題を背景に追いやめることは明らかな誤りである。」と指摘した²³⁾。

ガンディー主義者と農民組合との論争は平行線をたどるばかりではなかった。それは農民組合の側でのガンディーについての理解の浅さによるというよりも、農民運動が具体的に提起した課題にたいしてガンディー主義者達が専ら暴力・非暴力論という形で防戦したためであるように思われる。勿論、サハジャナーナンドのガンディー批判には問題が残っていたが、彼のガンディー主義者論が一定の有効性をもち、また、1938年12月3～4日のビハール州農民会議が州農民組合によるバカーシュト・サティヤグラハの組織的指導を決議したときにそのサティヤグラハが「あらゆる状況のもとで平和的にとどまる」ことを指示していたとすれば²⁴⁾、ガンディー主義者との対話の条件は農民組合の側から十分に用意されていたといえるであろう。

さらに、1937年の会議派州政府成立後の農民運動が明るみに出したのは、たといイギリス支配下の極めて限定的なものであったにせよ会議派によるその限定的な権力への執着であった。あるいは、限定的であるが故に「州自治」のもとで「農民組織」会議派が示す頽廢の意味の深さでもあった。死の直前のガンディーは、会議派が権力をはなれ人民奉仕団体に発展的に解消し、農村における社会的・道徳的・経済的独立の達成に力を貸すことを期待していたといわれる²⁵⁾。同様に、この問題の核心はすでに1930年代の農民運動のなかでも提起されており、その問いはガンディー主義者達にも開かれていたように思われる。

「註」 1) E.M.S. ナンブーディリパード著、大形孝平訳『ガンディー主義』1960年、38頁。

2) K.K.Datta, History of the Freedom Movement in Bihar, Vol. 2, Patna, 1957, pp.211—223.

3) ルイス・フィッシャー著、古賀勝郎訳『ガンジー』1968年、332頁。

4) I, p. 423.

5) ibid., pp. 425—426.

6) ibid., p. 427.

- 7) E.M.S. ナンブーデーリパード前掲書, 217頁。
- 8) I, p. 217.
- 9) II, p. 154.
- 10) 久野収「マハトマ・ガンディー」(『20世紀を動かした人々 I—世界の知識人』, 1964年, 377頁)。
- 11) I, pp. 252—253.
- 12) サハジアーナンドは, 1938年のベンガル旅行を通じて, 「今日, 農民と労働者の闘争における最大の危険は指導者の側にある」といっている。I, p. 529.
- 13) 蠟山芳郎訳「ガンジー自叙伝」(『世界の名著63——ガンジー・ネルー』1967年, 347—348頁)。
- 14) II, pp. 90—91.
- 15) *ibid.*, p. 111.
- 16) この経過については拙稿「インド国民会議派と農民運動1929—39」(大阪外国語大学学報第18号, 1968) 参照。
- 17) *Harijan*, Dec. 25, 1937.
- 18) *Harijan*, Feb. 5, 1938.
- 19) II, p. 168.
- 20) *Harijan*, Jan. 22, 1938.
- 21) *Harijan*, April 23, 1938.
- 22) *Harijan*, Jan. 29, 1938.
- 23) C.S., May 28, 1938.
- 24) K.K. Datta, *op. cit.*, p. 322.
- 25) E.M.S. ナンブーデーリパード前掲書, 204—205頁。

——未完——

(1968.12.29.)